

平成 22 年 6 月 5 日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19402013
 研究課題名（和文） 東南アジアにおける MSM に対するエイズ対策と国際協力機関・研究機関の支援動向
 研究課題名（英文） A Study of the trends of HIV/AIDS related assistance towards MSM in the Southeast Asia by international aid agencies and research institutions
 研究代表者
 岡島 克樹（OKAJIMA KATSUKI）
 大阪大谷大学・人間社会学部・講師
 研究者番号：80388397

研究成果の概要（和文）：本研究は東南アジアで同性間性的接触を行う男性（MSM）を対象とするエイズ関連国際協力事業を調査し、結果、グローバル・地域・各国レベルにおいて MSM 問題が主流化し、援助機関によるエイズ分野での支援の拡大につながっていることを確認した。

研究成果の概要（英文）：This study explored HIV/AIDS related international aid projects and found global/regional/in-country mainstreaming of MSM in the relevant policies, leading to some substantial increase in MSM/HIV related assistance by aid agencies.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2008年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
総計	5,500,000	1,650,000	7,150,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：ジェンダー・ジェンダー

キーワード：東南アジア、エイズ

1. 研究開始当初の背景

(1) 国連エイズ合同計画 (UNAIDS) の報告書によると、2005年末の時点で、世界には3860万人のHIV感染者・エイズ患者が存在した。地理的にはアフリカ・サハラ以南が感染の中心地 epicenterとなっており、世界のHIV感染者・エイズ患者の6割強がこの地域に集中している。しかし同時に、世界の各地ではセックスワーカー、MSM (Men having Sex with Men の略称)、静脈注射を用いる薬物使用者IDU、

収監者の4つの人口集団により多くの感染が見られる。

(2) このうち、MSMについては、そのHIV感染率は多くの地域で高止まりしている。2006年8月にトロントで開催された第16回国際エイズ会議で発表された数多くのMSM関連の調査のなかから幾つかの数字を取り出してみても、33パーセント(ザンビア)や28.3パーセント(バ

ンコク・プーケット)、12.5パーセント(イムンバイ)など、相当に高い数字が見られる。

(3) これは世界のなかで最悪の状況にあるサハラ以南においてさらに劣悪な状況にあるスワジランド(2005年の成人感染率33.4パーセント)やボツワナ(24.1パーセント)、レソト(23.2パーセント)、南アフリカ(18.8パーセント)に匹敵する数字であると言えよう。

(4) 上述のようなMSMのHIV感染状況に対し、現在では、幾つかの国連機関や二国間援助機関・大手国際NGOおよび大学等の研究機関を中心にして一定の動きが見られるようである。

2. 研究の目的

(1) したがって、本研究においては、まずMSMを対象としたHIV・エイズ関連事業にはどのようなものがあるのかを特定することを第一の目的とする。

(2) 第二に、途上国、とりわけ日本の開発援助にとって伝統的に重要な東南アジア地域において、国連機関や二国間援助機関・大手国際NGOがこの問題に対していつからどのような目的でどのような支援をおこなっているのかを特定する。

3. 研究の方法

上記のようなリサーチクエストに対するこたえを得るため、本研究では、以下の4種類の定性的方法を用いて情報収集し、分析をするという調査をおこなった。

(1) インタビュー調査：国際的なエイズ会議に参加して、MSMのためのHIV・エイズに関する事業や研究、政治的な活動を行っている人物を特定し、彼らに対するインタビューを行った。具体的には、本研究期間中に第9回アジア太平洋国際エイズ会議(インドネシア・バリ)、第17回国際エイズ会議(メキシコ・メキシコシティ)、第8回アジア太平洋エイズ会議(スリランカ・コロンボ)に参加した。なお、この調査の結果については「岡島克樹ゼミホームページ <http://www.okajimakatsuki.com>」において詳細な報告書を掲載している。

(2) 現場視察(フィールドワーク)：同時に、いくつかの事業が実際に行われている現場

を訪ね、事業実施責任者に対して聞き取りを行った。具体的にはカンボジアとタイで行われている事業を3つ視察し、責任者から話を聞いた。

(3) 講演会開催：国際エイズ会議等への参加をつうじてMSMのHIV・エイズ分野でとくに確かな知識と強い影響力を有すると特定された人物を日本に招聘し、聞き取りを行った。なお、彼らの知見をひろく共有するため、公開の講演会とした。具体的には、早稲田奉仕園・関西NGO協議会にてユネスコアジア太平洋地域局 地域HIV・エイズアドバイザーであり、アジアにおけるMSMとエイズの問題に関するメーリングリストを主宰するヤン・ヴィレム・ファン・ヴァインハールデン氏による講演会、京都大学・東京大学においてラ・トロブ大学教授・人間の安全保障研究所所長であり、前アジア太平洋エイズ学会長であるデニス・アルトマン氏の講演会を開催した。

(4) 文献調査：上(1)～(3)の活動をつうじて知りえた文献を求め、これらを読んで分析を行った。

4. 研究成果

(1) 上で記したような研究目的への答えを探すために、上で記した方法をもって情報収集し、分析した結果、以下に記すような成果を得た。

(2) 先進国(2000年代前半)：ゲイコミュニティにおけるHIV感染率がいったん下降・収束した先進国においても90年代後半あたりから再度増加がはじまり、おおむね2000年代前半には実際にどのくらいのHIV感染の増加が起こっているのか、どのようなサブ人口(地域や人種、年齢)で増加しているのかを特定する研究が先進国都市部に位置する大学や先進国の自治体関連部署(ロンドンやアムステルダム、ニューヨーク等)を中心にしておこなわれるようになった。

(3) 先進国(2000年代後半)：本研究においておこなわれた文献調査の結果から、2000年代後半においては、(2)で記した先進国諸都市におけるHIV感染増加という現象の原因を探求する研究がおこなわれていることが分かった。一言でいえばコンドームを使用しない肛門性交(unprotected anal intercourse、略してUAI)の増加がこの現象の直接的原因

であるが、これらの研究は、おおむね以下のような間接的原因を指摘するものである。第一に、セロ・ソーティング sero-sorting という原因をあげるが、これは HIV 陽性者同士でのあいだでウイルス量、ひいては感染確率を注意深く見極めながらおこなわれる性行動である。第二に、ベアバックング barebacking と呼ばれるものを原因としてあげるが、これは UAI をファンタジー化して見る一つの行動である。このほか、セーフセックス疲れ (safe sex fatigue)、治療楽観主義 (treatment optimism)、コミュニティ内の銃砲の世代間継承不足、エスニックマイノリティ内のホモフォビア、インターネット使用といった要因を挙げる者もいることが分かった。

(4) 途上国 (2000 年代前半) : 途上国においても、2000 年代の前半は、とくに開発援助が入りやすい地域、たとえば、カンボジアやタイなどにおいてどのくらいの MSM 人口がおり、そのうちのどのくらいの人 HIV に感染しているのか、また伝統的に MSM はどのような文化的視線にさらされてきたのかを確認する研究がなされていたことも分かった。また、HIV・エイズ問題のなかで MSM の存在を政策的に主流化する初期的な動きが国連エイズ合同計画 UNAIDS やアメリカ合衆国開発援助庁 USAID を軸として現れるのもこのころであった。

(5) 途上国 (2000 年代後半—政策的主流化の進展) : UNAIDS は『Intensifying HIV Prevention』(2005 年) という政策ポジションペーパーを出して以降、MSM にかかる政策概要を示した文書を出したりするなど、その動きをより堅固なものにしているが、2000 年代後半に見られる動きの特徴は UNAIDS のみならず、世界基金による「性的マイノリティとジェンダーアイデンティティに関する世界基金戦略」という文書を出すなど、関与する援助機関が多様化するということにある。

(6) 途上国 (2000 年代後半—事業・調査研究の地理的拡大) : 上に記した 2000 年代前半の動きは、本研究がおこなわれた 2000 年代後半になると、地理的に一層の拡大を見せるようになった。たとえば、これまで同性愛をタブー視してきたイスラム教圏やアフリカ諸国において MSM 人口推計や HIV 感染率の確認をおこなう調査研究に関する口頭発表や論文が見られるようになったのである。なお、これは世界基金による MSM に対する政策的注目、ひいては実際の資金援助が関係して

いることは言うまでもない。

(7) 途上国 (2000 年代後半—事業・調査研究の質的向上) : これまで HIV 予防の事業やこれに求められるデータを生み出す調査研究は個人の知識・態度・自己効力感に対する介入をつうじた行動変容を目指すモデルに基づくものであったが、2000 年代後半以降、介入の対象は、個人ではなく、その個人が生活する環境へとかわり、UAI が発生する環境・コンテキストの変容を目指すアプローチへと転換を見せるようになってきている。このため、MSM を違法化する反ソドミー法の撤廃のために政治的圧力をかけたり、社会に存在するスティグマを測定し、削減を試みる取組が開始されたりするようになってきている。

(8) 途上国 (2000 年代後半—フォーラムのグローバル化・地域化) : 2000 年代後半の動きは単に援助機関の政策転換のみならず、MSM 当事者のためのグローバルなフォーラムが存在するようになってきていることも分かった。また、これは同時に地域化の動きを見せている。アジアではアジア全体をカバーする APCOM、アジアの先進地域 (日本や韓国、台湾、シンガポールなど) をカバーする DAN という枠組みも立ち上がってきていることが分かった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 岡島克樹、2000 年代・エイズ史第三期の特徴とは何か——スティグマ削減という取組を中心にして、解放社会学研究、査読有、2010、掲載予定
- ② 岡島克樹、中谷香、フィリピンにおける MSM の HIV/エイズに関する状況とそれに対する対応の特徴、大阪大谷大学紀要、査読無、44 巻、2010、201—219

[学会発表] (計 1 件)

- ① 岡島克樹、国際協力 (エイズ分野) におけるスティグマへの注目—その背景と具体的な取組事例、日本解放社会学会「第 24 回日本解放社会学会大会」、2008 年 9 月 6 日、中京大学

[図書] (計 1 件)

- ① デニス・アルトマン (翻訳 岡島克樹、風間孝、河口和也)、岩波書店、ゲイ・アイデンティティー抑圧と解放、2010、420

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡島 克樹 (OKAJIMA KATSUKI)
大阪大谷大学・人間社会学部・講師
研究者番号：80388397

(2) 連携研究者

風間 孝 (KAZAMA TAKASHI)
中京大学・国際教養学部・准教授
研究者番号：50387627
河口 和也 (KAWAGUCHI KAZUYA)
広島修道大学・人文学部・教授
研究者番号：10351983